

仏伝文献とガンダーラ美術

岡 本 健 資

Biographies of the Buddha and Narrative Art in Gandhara

要 旨

誕生から涅槃に至る釈尊の全生涯にわたる伝記を見出すには、紀元後2世紀頃成立したアシュヴァゴーシャ作 *Buddhacarita* をまつ必要があるとされる。アシュヴァゴーシャと同じくクシャーナ朝の王カニシカとの関係が指摘される僧伽羅刹作『僧伽羅刹所集経』も、釈尊の誕生から死までを描く仏伝を含んでおり、仏教説話集 *Divyāvadāna* の第26～29章を形成する一連のアショーカー王の物語には、アショーカーが釈尊の誕生地から涅槃地に到る聖跡を巡ったとする巡礼物語が存在する。さらに、*Divyāvadāna* の源泉資料の一つとされる『根本説一切有部毘奈耶雜事』も、釈尊の全生涯に渡る簡略な仏伝を大迦葉が語る箇所を含む。これらはいずれも北西インドとの関係が指摘されている。また、このような誕生から涅槃までを描く仏伝美術の作例は、ガンダーラの美術資料の特徴でもある。そこで本研究では、北西インドに関係を持つ文献資料と美術資料とを比較し、その一致点を鮮明にする。

キーワード

北西インド、仏伝文献、仏伝美術、ガンダーラ

ABSTRACT

The first complete biography of the Buddha spanning from his birth to parinirvāṇa is thought to be Āśvaghōṣa's *Buddhacarita* (ca 2nd century CE). An almost complete story of the Buddha's life is also found in the *Seng-ga-luo-sha-suo-ji-jing* (ca 2nd century CE) and chapter 27 of the *Divyāvadāna*. Furthermore, in the *Mūlasarvāsitivādinaya Kṣudrakavastu*, which is said to be a scripture that served as a source for the *Divyāvadāna*, we can also find a brief biography of the Buddha that spans his whole life. All of these texts are said to have been edited in Northwest India, including the Gandhara area, and it has been pointed out that one of the characteristics of Gandharan Buddhist artwork - such as reliefs found in Buddhist votive stupas - is that it portrays the Buddha's entire life. In this paper, I will compare these kind of textual and art materials, making clear some of the points they share in common.

Keyword

Northwest India, Biography of the Buddha, Narrative Art, Gandhara

I 仏伝について

「仏伝」とは「仏陀の伝記」であり、すなわち、仏教の開祖である釈尊の事績を記したものである。釈尊の事績の内では有名なのは、釈尊がヒマラヤ山麓のカピラヴァストゥを拠点とする釈迦族の子として生まれたことや、生まれてすぐに七歩あるき「天上天下唯我独尊」と語ったとされること、老人・病人・死人を見て、誰も肩代わりできない苦悩の存在を知り出家を志したこと（四門出遊）、そして、「入涅槃」などと呼ばれる臨終時に釈尊が沙羅双樹の間に臥して亡くなったこと、などであろう。

以上のような事績を知っている者なら、「仏伝」とは、釈尊の誕生から涅槃までの全生涯を描いたものであり、すなわち「一代記」だと考えるのが普通である。ところが、釈尊の誕生から涅槃までを一連のものとして語る仏伝は多くないし、古くからあるわけでもない。そのことを見ていこう。

仏伝は、大きく2種類に分けられる¹⁾。一つは「仏典中に散在する、釈尊の事績に関する記録」である。例えば、梵天(=ブラフマン)が釈尊に説法をするよう促す「梵天勧請」の事績は「マッジマ・ニカーヤ」(*Majjhima-Nikāya*)などの経典に含まれ、シッタールタが将来偉大な人物となることを仙人アシタが予言する「アシタ仙による占相」の事績は「スッタ・ニパータ」(*Sutta-nipāta*)などに含まれる。しかし、これらの仏伝事績を記すことは、それらの仏典の主要な目的ではないことが多い。仏典に記される「教え」がどんな場面で語られたかという前後関係を伝えるために、釈尊の行動が言及されているのである。このように、経典(阿含やニカーヤ)あるいは律典などの中には、「釈尊の行状をある程度まとまって語る箇所」が散在する。これらは釈尊の事績を語るが、断片的で、そこに釈尊の一代記全体を描こうという意図は見いださにくい。

二つ目は、「独立した形で保存される釈尊の生涯を記す仏典」である。代表的なものは、釈尊の過去世物語が大部分を占める『ジャータカ・アッタヴァンナナー』(*Jātaka-aṭṭhavaṇṇanā*)の内、釈尊の現在世物語やこれと深く関わる過

去世物語を語る部分【ニダーナカター】(*Nidānakathā*)や、アシュヴァゴーシャ(*Aśvaghōṣa*)作のサンスクリット語詩形仏伝【ブッダチャリタ】(*Buddhacarita*)、あるいは説出世部の律蔵に含まれていたとされるサンスクリット語仏伝【マハーヴァストゥ】(*Mahāvastu*)、大乘経典として編纂されたサンスクリット語の仏伝【ラリタヴィスタラ】(*Lalitavistara*)などである²⁾。これらは、断片的ではなく、釈尊の生涯をまとまった形で伝えようとする資料である。

従来、このような2種の資料を区別なく「仏伝」として呼ぶことが多い。しかし、本稿では検討の際に便利のように、後者の仏伝資料に相当するものを「仏伝文献」と呼ぶことにする。なお、上記2種の内、どちらが先に完成したのかという問いが存在するが、現在は、前者(仏典中に散在する釈尊の事績)が先に存在しており、後者はそれらを編集して制作された、と見るのが一般的である。仏伝は「エピソードの結合によって成立している」(岩本・1975, 254頁)と指摘される通りである。

実際、「仏伝文献」に含まれる『仏本行集経』(587-591年訳(?))は、その名に「集」が含まれる通り、系統の異なる複数の源泉資料に基づく「釈尊の事績の集成」であり、仏伝文献がどのようにできあがってきたのか、を知る上で手がかりとなる資料である。さらに、この『仏本行集経』は、その経の末尾において、部派ごとに仏伝文献を有した可能性を示唆する(平川・1991, 13頁)。

すなわち、「或問うて曰く、当に何が此の経を名くべきと、答へて曰く、摩訶僧祇師は名けて大事と為し、薩婆多師は此の経を名けて大莊嚴と為し、迦葉維師は名けて仏生因縁と為し、曇無徳師は名けて釈迦牟尼仏本行と為し、尼沙塞師は名けて毘尼蔵根本と為す³⁾」と。これら五師(摩訶僧祇 = *Mahāsamghika*・薩婆多 = *Sarvāstivādin*・迦葉維 = *Kāśyapīya*・曇無徳 = *Dharmaguptaka*・尼沙塞 = *Mahīśāsaka*)が所属するのは「律蔵伝持の五部派」である⁴⁾。しかも、『仏本行集経』に見るように、それらをもとに自由に素材を集成し仏伝編纂が許されてい

る点からみると、仏伝というものが、部派の垣根を超えうる存在であったことも推測される(平井・2002, 31頁)。

ところで、これら「仏伝文献」は、釈尊に対する主要な事績(「成道」や「初転法輪」など)において一致するが(岡野・1999)、相違点も存在する。大きな違いの一つは、仏伝がどの事績でもって終了するか、という点である。

釈尊の誕生から涅槃までを描く一代記的仏伝は少ない。「ニダーナカター」は「祇園布施」に終わり、「マハーヴァストゥ」も釈尊の現在世の事績としては僧団の成立で終わる。「ラリタヴィスタラ」も諸弟子たちの出家に終わる。

釈尊の誕生から涅槃までの今生の全生涯を語る最古の仏典は『ブッダチャリタ』と『僧伽羅刹所集経』とされる⁵⁾。両者の内、『ブッダチャリタ』の現存サンスクリット語テキストは「降魔成道」を描く章の半ばまでで途切れているが、その後「舍利八分」と「アショーカ王による仏塔建立」に到る事績群の記述を漢訳とチベット訳の中に残しており、本来涅槃前後までを描く資料だったと考えられる。

一方、ガンダーラ美術に先行するインド古代初期美術に属する、中インドのパールフットやサーンチャーなどの作例でも仏伝を扱ったものが存在する。しかし、そういったガンダーラ美術に先行する作例においては宮治昭が言うように、「釈尊の誕生から涅槃までを順序立てて表現するようなことはな」いのである(宮治・2009, 47頁)。

これに対して、ガンダーラ仏伝美術では、誕生から涅槃までを象った仏伝図が時系列を意識して配置されている。このようなガンダーラ仏伝美術と文献資料との間にはどのような関係があるのか⁶⁾。本研究では、ガンダーラ仏伝美術資料と北西インドと関係の深い文献資料間の比較を行い、両者の関係の一端を示したい。

II ガンダーラ美術と仏伝

1. ガンダーラの仏伝美術

インドにおける仏教美術と比較してその表現が「きわめて西方的」とされるガンダーラ美術のもっとも大きな特徴の一つは、「それまでインドで象徴的にしか表現されなかったブッダが、

ガンダーラでは人間の姿で表現される」(小谷・1996, 113頁)ということである。ガンダーラ美術が興ったとされる時代(1世紀前半から中頃)に、仏像の誕生が推測されるのである。

1世紀以降クシャーナ朝下で盛んとなるガンダーラ美術において、多くの仏伝浮彫が制作されるが、宮治は、ガンダーラの仏伝美術の特徴について、「伝記的な仏伝美術では、誕生(あるいは燃燈仏授記や託胎霊夢)から涅槃(あるいは荼毘・分舍利・起塔)までの釈迦の生涯に対する関心が軸となる。我々の感覚では仏伝美術と言えば、当然のごとく釈迦の一代記を表したものと考えやすいが、インドではむしろそのような表現は少なく、インド美術の中では異端と言えるガンダーラ美術の一系統に、伝記的な仏伝美術の性格が顕著に窺える。ガンダーラの仏伝美術は釈迦の説話を、しばしば通時的に、一齣一齣、筋を追って語ろうとする。そこでは釈迦がいつ、どのようなことを成したかを、叙述的・叙事的に表現することに主眼がおかれる。ガンダーラの仏伝浮彫を主題ごとに整理すると、実に一二〇以上の場面が知られ、インドでは他に例を見ない。いかにガンダーラ美術が釈迦伝を詳しく知ろうとしたかがわかる」(宮治・2010, 187頁)と述べている。以下、ガンダーラ仏伝美術における「一代記的仏伝」を表現した作例を検討していく⁷⁾。

2. 年代記的表現系統の仏伝図

インド内部では、釈尊の生涯を時系列に沿って伝記的に表そうとする美術資料は少なく、むしろ、ガンダーラの仏伝美術資料の内に、釈尊の生涯を時系列的に、その一代記(誕生から般涅槃まで)を描こうとするものが確認できる。このような仏伝美術作例として、ガンダーラ出土の「奉献(小)塔」(votive stupa)と呼ばれる塔の基壇部に嵌め込まれた仏伝浮彫(例:松岡美術館仏伝浮彫⁸⁾/ベシヤーワル古物商旧蔵浮彫⁹⁾)を挙げるができる。奉献塔の基壇部浮彫には、時系列に沿って釈尊の誕生から涅槃に至る今生の全生涯の事績を描こうとする、すなわち、「一代記的仏伝を描こうとする志向」を見出すことができる。例えば、現在のところ、

7石版20画面(もとは「誕生」や「成道」など、現在よりも多くの画面があった可能性もある)が残存するペシャーワル古物商旧蔵仏伝浮彫を見ると、次のような筋書に沿った事績が見出せる(宮治・2010, 189-190頁)。

「燃燈仏授記」→「託胎靈夢」→「占夢」→「占相」→「バラモンへの布施」→「通学」→「習学」→「弓術」→「結婚式」→「納妃」・「納妃の歓迎¹⁰⁾」→「宮廷生活」→「出家の決意」→「出城」→「釈迦説法」→「涅槃」→「荼毘」→「分舍利」→「舎利の運搬」→「塔建立」

この「ペシャーワル古物商旧蔵仏伝浮彫」の作例には、釈尊の全生涯を時系列に沿って描こうとする志向が見出せる。また、この作例を含む、ガンダーラの奉献塔基壇部における仏伝浮彫の構造については、宮治が既に述べているように「燃燈仏授記や託胎靈夢から始まって、初転法輪あたりまでの釈迦の前半生にあたる場面の後、仏説法すなわち教化の場面を一・二挿入し、すぐに涅槃・荼毘・分舍利・起塔などの涅槃関係の場面が続き、それで終わっている」(宮治・1997, 4頁)という特徴がある。このような表現形式をとる仏伝図は「年代記的表現系統」と呼びうるもので、本稿ではこの呼称を用いる。ガンダーラの「年代記的表現系統」の仏伝の構造は下記のように図示できる。

【年代記的表現系統の仏伝図】

燃燈仏授記／誕生～初転法輪+教化話+涅槃前後

しかし、ガンダーラには、もう一つの表現系統の仏伝図が見られるので、それを確認する必要がある。

3. 教化・神変表現系統

ガンダーラの仏伝図の中には、教化や神変を連続して表現している系統の仏伝図も存在する。例えば、シクリ・ストゥーバ(ラホール博物館蔵)の作例は、次のような場面で構成されている(藤原・2007)。

「ヤサの帰依」→「四天王奉鉢」→「獼猴奉蜜」

→「遊女の寄進」→「樹下観耕」→「龍王の頌歌」→「兜率天の菩薩」→「草刈人の布施」→「精舎の釈尊」→「從切利天降下」→「梵天勸請」→「帝釈窟説法」→「燃燈仏授記」

これを見ると、時系列を意識したものとはいき切れず、「涅槃」を含まず一代記的でもない。むしろ、釈尊の求道や説法・神変場面に主体がおかれていること、そして釈尊の発心や成道前後あるいは帰郷説法以降、涅槃前までの釈尊による「教化」の事績が描かれることに注目できる。教化・神変場面の他の作例として、「十六仙人の訪仏」・「双神変」・「アングリマーラの帰仏」・「醉象調伏」などが見出せる(宮治・2010, 190頁)。これらの事績は、初転法輪の後から涅槃より前に位置するものが主であり、これに、前節の図を合わせると下記ようになる。

【年代記的表現系統の仏伝】※枠内が主なる内容。点線は「少ないが作例有り」の意

燃燈仏授記／誕生～初転法輪+教化話+涅槃前後

【教化・神変表現系統々】

燃燈仏授記／誕生～初転法輪+教化話+涅槃前後

年代記的表現系統は、初転法輪から涅槃前後までの事績を詳細に描かず簡略化するのに対し、教化・神変表現系統では、年代記的表現系統が詳しく描かない教化の事績を内包する構図となる。従って、両系統の内容は、釈尊の全生涯を記す上で、相互補完の関係にあるようにみえる。

4. ガンダーラ仏伝美術と仏伝文献

ガンダーラの仏伝美術と仏伝文献はどのような関係にあるのか。既に見たように、現存する仏伝文献の内、誕生から涅槃までを一貫して記述するテキストは少ない。仏伝文献の多くは、ガンダーラの仏伝図のように釈尊の生涯を描こうとする意図が見出せるが、「燃燈仏授記」や「託胎靈夢」などで始まり「成道」で終わるもの(『修行本起経』)や「梵天勸請」・「初転法輪」・「三迦葉帰仏」までで終わるもの(『太子瑞応本起経』・『異出菩薩本起経』)、あるいは、「諸弟子の出家」や「帰郷説法」まで(『過去現在因果経』・『普曜

経』・『方広大莊嚴経』・『ラリタヴィスタラ』・『仏本行集経』・『衆許摩訶帝経』)、時には、「祇園精舎布施」までで終わるもの(『ニダーナカター』)もある(宮治・2010, 190頁)。すなわち、涅槃前後の仏伝記事を描くことなく終わるのが一般的であり、誕生あるいはこれと関わる過去世物語(燃燈仏授記など)から初転法輪、あるいはその後の教化の事績を加えるものの、涅槃前後が描かれないという点に主な仏伝文献の特徴がある。主な仏伝文献の構造を図示すれば以下のようである。

【主な仏伝文献】

燃燈仏授記／誕生～初転法輪 + 教化話

涅槃前後の事績はどこに記載されているのかといえば、非大乘系「涅槃経」類と呼ばれる一群の文献に、涅槃前後の事績が記される(例:『長阿含経』・『遊行経』・『般泥洹経』・法顕訳『大般涅槃経』・『根本説一切有部毘奈耶雜事』(漢訳/藏訳の対応箇所)・『マハーバリニッバーナ・スッタタ』(*Mahāparinibbāna-suttanta*)など)。これらは、釈尊の涅槃とその前後の事情を詳述するが、それ以前の釈尊の事績を詳しく時系列に沿って記すことはない。従って、釈尊の全生涯を表現するという志向を見出せない。とはいえ、この非大乘系「涅槃経」類を、上述の主な仏伝文献の構図に連結させると、次の図のように、釈尊の一代記的仏伝の形ができあがる。

【主な仏伝文献+非大乘系「涅槃経」類】

燃燈仏授記／誕生～初転法輪 + 教化話 + 涅槃前後

この構図は、ガンダーラの両系統を併せたものと似通っている。しかし、主な仏伝文献だけ、あるいは、非大乘系「涅槃経」類だけでは、このような図は完成しない。但し、このような一代記的な構造をとる仏伝も存在する。

5. 『ブッダチャリタ』

釈尊の全生涯にわたる事績を描き、それを時系列に並べている「一代記的仏伝」を記す資料が存在する。その内、比較的古いものとしては、

アシュヴァゴーシャ作『ブッダチャリタ』(*Buddhacarita*: 以下、BCと略す)を挙げることができる。BCは、釈尊の生涯を、誕生から涅槃までの一連のものとして語り、時系列を意識して事績が配置される。BC各章の配置を図示すると次のようになる。

【BC】

(1) 誕生～(15) 初転法輪 (16)～(20) 教化話
(21) 簡潔な教化話の列挙 (22)～(28) 涅槃前後

※丸括弧内数字は『ブッダチャリタ』の章数

BCにおける「初転法輪」以降の、第16章から第20章までの教化の事績の内訳は次の通りである。すなわち、第16章では「長者の息子ヤシャス(=ヤサ)・三迦葉・ビンビサーラ王・マガダの大衆と神々を教化する事績」を記し、第17章では「舍利弗・目連・大迦葉を教化する事績」、第18章では「給孤独長者を教化する事績と、舍利弗と給孤独長者による祇園精舎建立の事績」を記す。次に、第19章では「カピラヴァストウでの父王たち釈迦族を教化する事績」について記し、第20章は、祇園精舎の寄進を受けた後の物語である「ブラセーナジット王を教化する事績」を記述する。同じ第20章の最後尾には、釈尊が「生母マーヤーを教化する事績」(=従切利天降下)を記す。

BCの中で、「涅槃前後」に該当する部分は、「アンバパーリーを教化する事績」に始まる第22章から「分舍利」を記す最終章(第28章)までと見なしうる。その理由は、第22章第1詩節に「それから世間〔の者達〕を救って後、説法者中の最勝者(ブッダ)は、法を地上に普及し終わって、『〔今や〕涅槃に相応しい』と考えた¹¹⁾」という文章が配置されているからである。また、この第22章から第28章の七章は、釈尊の涅槃前後の事績を詳述する非大乘系「涅槃経」類の内容と類似している¹²⁾。下田正弘もBCについて「涅槃経に、内容・分量ともに匹敵する文献である」(下田・1997, 62頁)と記し、非大乘系「涅槃経」類に合致する内容(「涅槃前後」)をBCが内包することを指摘する。

次に、上図において、BCにおける第20章ま

での「教化話」と別立てにした第21章の「簡潔な教化話」について解説したい。まず、第21章の第1詩節は、「解脱を望む天の神々と生母を天界において教化した後、牟尼は教化すべき者達を教化しつつ世間を渡り歩く¹³⁾」という文章で始まる。次に、韻文のみで形成されるBCは第20章より前では、一つの教化の事績を説明するのに少なくとも数詩節以上を割くのが通常である。ところが第21章では、一つの詩節で一つの教化の事績を述べ、あるいは、一つの詩節で複数の教化話を示すような、非常に簡潔な教化の事績の列挙が約半分を占めている。具体的には、一詩節ごとに異なる様々な人物に対する教化話を第36詩節¹⁴⁾まで羅列し¹⁵⁾、章の後半では、デーヴァダッタが象をけしかけて釈尊を襲わせた果報としての墮地獄を述べるが、この箇所も「カーラ(死神)にも等しかった象が教化された状態となった時、...¹⁶⁾」(第21章第62詩節)と記され、教化の事績の一つと見なすことができる。第21章の章名が「行為の相続の章¹⁷⁾」(las kyi rgyun gyi le'u)であることも、この章の内容が教化話の列挙であることをよく示している。

このように、BCは、主な仏伝文献が記す事績の後、簡潔な教化話を列挙する部分を介在させ、非大乘系「涅槃経」類を後続させた形をとる。ガンダーラの年代記的表現系統の仏伝図同様、誕生から涅槃までの事績を時系列的に表現している仏伝文献である。そして、BCがガンダーラ仏伝図と同時代に北西インドという同じ地域に共存した点は注意すべきである。

6. 『アショーカ・アヴァダーナ』

釈尊の誕生から涅槃に至る今生の全生涯の事績を描こうとする、すなわち、「一代記的仏伝を描こうとする志向」は、仏伝文献以外の資料にも見出すことができる。説一切有部系の仏教説話集『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(以下、DAと略す)に含まれる¹⁸⁾第26章から第29章までを一般に『アショーカ・アヴァダーナ』(2~3世紀に成立(?))。以下、AA¹⁹⁾と呼ぶが、そのAAの第27章には、アショーカ王がウパグプタ長老に導かれて仏跡を巡礼する話²⁰⁾が含まれる。この巡礼において、王は、釈尊の誕生処

から涅槃処まで三十二箇所²¹⁾の仏跡を訪問し、各々の地で、ウパグプタや土地の神々から釈尊の事績を聞く。この巡礼物語は、釈尊の一代記的仏伝を簡略な形で示していることとなるが、その構造は次のように図示できる。

【AA】

(1) 誕生~(26) 初転法輪 (27)~(31) 教化話
vistareṇa yāvat (中略) (32) 涅槃

ここでの「教化話」とは、ウパグプタが語る第27番目の巡礼処での「千人の結髪苦行者の改宗²²⁾」(=三迦葉の帰仏(?))、そして、第28処「ピンビサーラ王・八万の神々・マガダのパラモンと長者たちによる四諦の知見²³⁾」、さらに第29処の「シャクラと八万の神々による四諦の知見²⁴⁾」(=帝釈窟説法(?))と、これに後続する第30処「大神変²⁵⁾」(=舍衛城神変(?))及び第31処での「從切利天降下²⁶⁾」を指す。その後、AAは「中略」という意味で用いられる vistareṇa yāvat という語を介在させ、第32処としてのクシナガリーでの釈尊の「涅槃」の事績を記す²⁷⁾。

このように、AAにも釈尊の「誕生から涅槃まで」を表現しようとする志向を見出せる。これは、BC並びにガンダーラ仏伝美術における年代記的表現系統と類似する点である。さらに、BCの構造との密接な関係をも指摘できる²⁸⁾。両資料の構造を上下に示すと下記のとおりとなる。

【AA】

(1) 誕生~(26) 初転法輪 (27)~(31) 教化話
vistareṇa yāvat (中略) (32) 涅槃

【BC】

(1) 誕生~(15) 初転法輪 (16)~(20) 教化話
(21) 簡潔な教化話の列挙 (22)~涅槃前後

BCの(21)「簡潔な教化話の列挙」が、AAにおいて vistareṇa yāvat (中略) に該当することが判る。そして、AAにおける vistareṇa yāvat (中略) の前後の事績とBC(21)の前後の事績も一致すると言える。AAでの vistareṇa

yāvat (中略) の直前の事績は第 31 処「從切利天降下」であり、BC (21) の直前の事績は、第 20 章最後尾の「從切利天降下」である。さらに、AA での *vistareṇa yāvat* (中略) に後続する事績は第 32 処「涅槃」であり、BC (21) の直後の事績を、第 22 章以降に始まる「涅槃に関する事績」と見なすことができるならば、AA と BC の構造は一致していると言える。

以上のように、BC と AA が、非常に似通った構造の「釈尊の生涯」を描いていることを看取できる。なお、この AA 及び同内容を含む漢訳『阿育王伝』・『阿育王経』は、北西インドで最終的にまとめられた可能性が山崎元一によって指摘されている (山崎・1979, 7-8 頁)。

7. 『根本説一切有部毘奈耶雜事』

一代記的仏伝を、時系列に沿って描こうとする志向は、『根本説一切有部毘奈耶雜事』(以下、『雜事』と略す) 卷第三十八に含まれる下記の物語にも見出せる。

マガダ国の王舎城付近にいた大迦攝波 (マハーカッサパ) は、釈尊の入涅槃を大地の震動によって確信する。そして、大迦攝波は、マガダ国王である未生怨 (アジャセ) の信仰が未熟である故に、釈尊の涅槃を知れば命を落とすかもしれない、と考える。そのような事態を防ぐため、大迦攝波は、釈尊の今生の生涯における事績を絵に描いて知らせよう指示する。描くべき絵は、まず「菩薩が諸史天宮で入胎を思案する事績」(降兜率) に始まり、「託胎」、「踰城出家」、「苦行」、「成道」、「初転法輪」と続き、さらに次のように指示される。

... 次於室羅伐城為人天衆現大神通。次往三十三天為母摩耶廣宣法要。寶階三道下瞻部洲。於僧羯奢城人天渴仰。於諸方國在處化生。利益既周將趣圓寂。遂至拘尸那城娑羅雙樹。北首而臥入大涅槃。...²⁹¹。

つまり、「舎衛城神變」・「從切利天降下」の後、「於諸方國在處化生」すなわち、諸方の国で生類を教化することを示す文を介在させ、その後「利益既周將趣圓寂」として、圓寂 (= 入滅/涅槃)

に趣くことを示す文を続けている。この構造は、BC や AA の図との類似を指摘できる。

【雜事】

降兜率・託胎～初転法輪 教化話 (切)
於諸方國在處化生 涅槃

【AA】

(1) 誕生～(26) 初転法輪 (27)～(31) 教化話 (切)
vistareṇa yāvat (中略) (32) 涅槃

【BC】

(1) 誕生～(15) 初転法輪 (16)～(20) 教化話 (切)
(21) 簡潔な教化話の列挙 (22)～涅槃前後

※ (切) は「從切利天降下」の事績。

BC (21) 「簡潔な教化話の列挙」が、AA の *vistareṇa yāvat* (中略) の位置に該当することは既に指摘したが、さらに『雜事』では、「於諸方國在處化生」がこれに対応しており、BC の複数の教化話の列挙とよく一致する。また、その直前には、三資料がともに「從切利天降下」を配置しており、その点でも一致を見る。『雜事』も北西インドとの関わりが指摘される文献である (山崎・1979, 134-5 頁)。

以上に見てきた、BC と AA、『雜事』の構造は、主な仏伝文献と非大乘系「涅槃経」類とを合致させた形を取っている。そして、これらの構造は、誕生から成道・初転法輪までを詳しく記しており、教化話を含むが全体の分量からすると比較的簡潔に記され、涅槃へと連結される。これらは既に見たガンダーラ仏伝図の二つの表現系統の内、「年代記的表現系統」によく対応していることが判る。BC、AA、『雜事』は簡略化されているとはいえ、教化話は明確に記載されている。しかしながら、誕生から涅槃までの仏伝を時系列に沿って記載しながらも、「教化話」の部分だけを別の箇所記述する文献が存在する。次にみる『僧伽羅刹所集経』である。

8. 『僧伽羅刹所集経』

BC・AA・『雜事』の構造とは一致しないが、北西インドとの関わりが深く、釈尊の一代記を

語る仏伝文献として『僧伽羅刹所集経』(384年訳)が知られている。

この文献は、アシュヴァゴーシャと同じくカニシカ王の師とされる僧伽羅刹の作で、三巻(巻上・巻中・巻下)から成り、「巻上」冒頭に、過去世を含め菩薩が行った実践徳目を列挙する³⁰⁾。但し、その後、次のような仏伝中の事績を記す。すなわち、「降兜率」(從兜術天降神: 122b6³¹⁾)に始まり、「七歩の歩行」(行七歩: 122b17)、「踰城出家」(菩薩出城門: 122c22)、「剃髮」(菩薩右手執刀自剃頭髮: 122c26)、「菩提道場での瞑想」(我不解加趺坐。不逮一切智不起于座: 123a1-2)、「成菩提」(一切智成等正覺: 123a7)と続く。その後は、釈尊が「無侶・無師」(123a25)であること、そして、六神通と類似する諸々の智や四無畏などの釈尊の属性が説かれて巻上は終わる。巻中は、人間の諸苦の観察が始まるが、続いて「爾時世尊云何降伏魔衆」(124a19)として、「降魔」が記述される。しかし、その後は再び「三弁才」(125a1)など釈尊の属性・能力に言及する記述が項目ごとに続き、さらに、釈尊あるいは仏の身体的特徴(相)と能力が、例えば「微妙之首」・「微妙之髮」などと列挙される。その後、釈尊を「海」(世尊海: 131c13)や「船」(如來船: 132a4)などに喩えることで、その能力や属性を説明し、最後は「世尊はいかなる城を有するのか」(世尊有何城: 134b1)と記され、「城」の喩えで巻中は終了する。巻下は、アングリマーラ(鶯囀鬘: 134c17)や鬼(阿羅婆鬼など: 135a28)、デーヴァダッタ(調達: 135c24)、象(檀那波羅: 136a25)、阿闍世(?) (王: 136c16)などに対する教化の物語を列挙して後、釈尊の属性や能力についての説明を行う。続いて、大迦葉(141c21)や舍利弗(142a25)の入滅、そして、釈尊の入滅の事績(142c12-144a29)を記す。その後さらに、初転法輪から涅槃までの間に、釈尊が何処において説法を行ったかを記する(144b1)³²⁾。アショーカ王(144c13)による舍利分配と起塔の事績を記し、巻下を終了する。仏伝に注目して、構造を図示すれば下記のようになる。

【僧伽羅刹所集経】

〔巻上〕降兜率・誕生～成道

〔巻中〕降魔

〔巻下〕教化話・涅槃・教化話の列挙(初転法輪等)

『僧伽羅刹所集経』に記される仏伝は、時系列を意識してはいるが分量は非常に少なく、むしろ、釈尊の能力・属性を讃える部分が主要内容であると見ることができる。また、22箇所に見れる「詳細は契経に説く通りである」(廣説如契経: 142b21, etc.)の定型句は、『仏本行集経』と同じく、源泉資料としての他経の存在を示し、僧伽羅刹が、それらの素材を用いて、誕生から涅槃までを扱う時系列に沿った仏伝文献を制作したと見なすことができる。『僧伽羅刹所集経』もBC、AA、『雑事』と志向を同じくするテキストと考えてよい。

Ⅲ おわりに

ガンダーラ仏伝美術において特徴的である「釈尊についての一代記的仏伝を描こうとする志向」が、『ブッダチャリタ』などの仏伝文献ばかりでなく、『アショーカ・アヴァダーナ』や『根本説一切有部毘奈耶雜事』にも確認できた。また、それら文献資料相互も構造的に類似しており、それらが全て北西インドとの関係を有することが従来指摘されてきた文献資料である点は、「一代記的仏伝」と北西インドとの結びつきを一層強固なものとする証拠となる。さらに、上記三資料ほどの構造一致を示さないが、『僧伽羅刹所集経』の構造も一代記的仏伝に類するものと見ることができ、ガンダーラ仏伝美術と志向を一にするものであることが確認できた。

付記 本稿は平成24-25年度科学研究費補助金(若手研究(B)「インドにおける釈迦の一代記を描く仏伝と図像の比較研究」)を受けた研究成果の一部である。

参考文献

(英語文献)

1. E. H. Johnston, *Āśvaghōṣa's Buddhacarita or Acts of the Buddha*, orig. pub., Lahore, 1936; New Enlarged

edition, Delhi: Motilal Banarsidass, 1984.

2. É. Lamotte, *History of Indian Buddhism*, trans. S. Webb-Boin, Peeters Press, 1988.
3. J. Przyluski, *La légende de l'empereur Açoka*, Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1923.
4. John S. Strong, *The Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton University Press, 1983.

(日本語文献)

1. 「仏本行集経解題」(『国訳一切経』本縁部三) p. 1.
2. 井ノ口泰淳・宇野順治「初期仏教彫刻における仏伝図の展開」『仏教学研究』35, 1979年, pp. 1-32.
3. 岩本裕『仏教の虚像と実像』(岩本裕著作集第1巻) 同朋舎出版, 1988年。
4. 岩本裕「仏伝文学の成立(二)」『国訳一切経印度撰述部月報 三蔵(tri-piṭaka)』(第一輯), 大東出版社, 1975年, pp. 251-258.
5. 上枝いづみ「ガンダーラのストゥーパ形胸部にみられる連続式仏伝図: 釈迦の年代記的表現展開を中心に」『平成20-24年度科学研究費補助金 ガンダーラ美術の資料集成とその統合的研究 報告書 Vol. 1』(研究代表: 宮治昭), 2013年, pp. 93-107.
6. 宇野順治・門川徹真「八相彫刻と経典の関係」『印度学仏教学研究』22-1, 1973年, pp. 73-86.
7. 岡野潔「仏陀が永劫回帰する場所への信仰: 古代インドの仏蹟巡礼の思想」『論集』26, 1999年。
8. 梶山雄一・小林信彦・立川武蔵・御牧克己訳『ブッダチャリタ』(原始仏典第10巻) 講談社, 1985年。
9. 肥塚隆『美術にみる釈尊の生涯』平凡社, 1979年。
10. 肥塚隆「インドの仏伝美術」『南都仏教』35, 1975年, pp. 87-111.
11. 小谷伸男『ガンダーラ美術とクシャン王朝』(東洋学研究叢刊之五十一) 同朋舎出版, 1996年。
12. 下田正弘『涅槃経の研究: 大乘経典の研究手法試論』春秋社, 1997年。
13. 平井宥慶「太子瑞応本起経 解題」『太子瑞応本起経・仏所行讃』(新国訳大蔵経②本縁部1) 大蔵出版, 2002年, pp. 7-51.
14. 平等通昭『印度仏教文学の研究』(第1巻: 梵文仏所行讃の研究) 印度学研究所, 1930年。
15. 平岡聡「第1章 仏伝からみえる世界」『仏典から見た仏教世界』(新アジア仏教史03インドⅢ) 俊成出版社, 2010年。
16. 平岡聡『説話の考古学: インド仏教説話に秘められた思想』大蔵出版, 2002年。
17. 平川彰「八相成道と八相示現」『南都仏教』66, 1991年, pp. 1-22.
18. 藤原達也「ガンダーラ「仏伝図」再考: 所謂シクリ・ストゥーパを主対象に」『オリエント』50-2, 2007年, pp. 90-119.
19. 外薮幸一『ラリタヴィスタラの研究』(上巻) 大東出

版社, 1994年。

20. 松岡美術館編『館蔵古代東洋彫刻』松岡美術館, 1994年。
21. 宮治昭『インド仏教美術史論』中央公論美術出版, 2010年。
22. 宮治昭『インド美術史』吉川弘文館, 2009年。
23. 宮治昭「序章 仏伝美術の伝播と変容: シルクロードに沿って」『シルクロード学研究』vol. 3, 1997年, pp. 3-8.
24. 山崎元一『アショーカ王伝説の研究』春秋社, 1979年。

<略号>

AA: *Aśokāvadāna*
 BC: *Buddhacarita*
 DA: *Divyāvadāna*
 T: 『大正新脩大蔵経』

注

- 1) 分類には、次の研究を参考にした。外薮幸一「仏伝経典の形成過程について」『鹿兒島経済大学論集』24(3), 1983年, pp. 47-69.
- 2) 『異出菩薩本起経』・『太子瑞応本起経』・『修行本起経』・『中本起経』・『過去現在因果経』・『仏所行讃』・『仏本行経』・『僧伽羅刹所集経』・*Mahāvastu*・『仏本行集経』・『普曜経』・『方广大莊嚴経』など。これら漢訳の仏伝資料については、成立時期などの点から既に分類がなされている(平井・2002)。また、漢訳資料にかぎらず仏伝資料全般を分類した研究も存在する(平等・1973)。
- 3) 原文は次の通り。「或問曰當何名此經。答曰。摩訶僧祇師。名為大事。薩婆多師。名此經為大莊嚴。迦葉維師。名為佛生因緣。曇無德師。名為釋迦牟尼佛本行。尼沙塞師。名為毘尼藏根本。」(T. 3, 932a).
- 4) 「仏本行集経解題」(『国訳一切経』本縁部三) pp. 2-3.
- 5) 「兜率天からの下生から般涅槃と火葬にいたるシャーキャムニの完全なる伝記を見いだすためには、紀元2世紀まで待つ必要がある」と指摘するLamotteは、その完全なる仏伝として、カニシカ王の師とされる僧伽羅刹の作『僧伽羅刹所集経』(384年訳)と、同じくカニシカ王の師とされるアシュヴァゴーシャ(馬鳴: *Āśvaghōṣa*) 作 *Buddhacarita* とを挙げる(Lamotte・1988, p. 655)。
- 6) 宮治昭による次のような指摘がある。「ガンダーラの仏伝美術の大きな特徴の一つは、しばしば「釈迦の生涯」を表そうとする志向が顕著に窺えることである。時間の経緯に従って、釈迦の一生を伝記的に表そうとする表現は、インドではむしろ珍しい。こうした「釈迦の生涯」を表す表現は、クシャーン朝の詩人アシュヴァゴーシャ(馬鳴)の書いた「ブッダチャリタ(仏所行讃)」の仏伝経典の内容とも呼応するもので、この時代に釈迦を偉大な聖者として伝記的に捉える見方が行われ、ガンダーラ美術において特に

- 好まれたことがわかる。」(宮治・1997, p. 4).
- 7) 検討に際し、宮治昭 (1997, 2010) と上枝いづみ (2013) の研究を参照した。
 - 8) 松岡美術館 (1994, fig. 20 (1)-(22)) を参照。
 - 9) 肥塚 (1979, 52a-g) を参照。
 - 10) 上枝は、太子の「帰城」と「帰城の歓迎」と見るのが相応しいと指摘する (上枝, 2013, 101 頁)。
 - 11) 『ブッダチャリタ』(以下、BC と略す) の梵文原本は、第 14 章第 31 詩節 (欠落部分も有り) までしか残っていない。そのため、本稿中に引用する部分是对応する蔵訳 *Sangs rgyas kyi spyod pa zhes bya ba'i snyan ngag chen po* (北京版 No. 5656[Ne, 1-124b8] [以下、P と略す]; デルゲ版 No. 4156[Ge, 1b1-103b2] [以下、D と略す]) を用いる。また、本文中に和訳を示したチベット文は次の通り「de nas 'jig rten rjes bzung nas // dus kyi smra ba rnams kyi mchog // chos kyis (P. kyi) sa ni khyab mdzad nas // mya ngan 'da' ba dang mtshungs dgongs // (P94a5-6; D78a1-2)」。
 - 12) BC 第 22 章から第 26 章における釈尊の旅程は、涅槃前後の事績を描いた『マハーパリニッパーナ・スッタタ』とよく一致する。詳細は拙稿『*Divyāvadāna* 第二十七章に見られる佛跡巡禮と *Buddhacarita*』(『東方学』110, 2005 年) を参照されたい。
 - 13) thar 'dod lha na gnas rnams dang // skyed ma mtho ris su btul nas // thub pas gdul bya rnams 'dul zhing // de nas de ni 'jig rten rgyud // (P90b7-8; D75a3-4)。
 - 14) BC 21.36 (P92a7-8; D76a7)。
 - 15) 例えば、ri lnga'i dbus kyi grong khyer du // 'od ldan 'tsho byed dpang po dang // gro bzhin skyes dang yan lag sbyin // rnam par 'dren pas de nas btul // 「それから、五山の中央の都市において、ジョーティシュカ、ジーヴァカ、シューラとシュローナコーティーカルナとアンガダを教導者 (ブッダ) は教導した。」 [BC 21.2 (P75a4; D90b8)]; chos kyi thos pa nyid las ni // mi skyong dpal ni spangs (D. yangs) pa can // spos 'dzin gyi (P. gyis) ni dpang phyug 'dir // pa dma zhes bya rnam par btul // 「法の聴聞のみにより、不動の栄光 (= 国王の地位) を捨て去った、パドマ (= ブシュカラ) という名のガンダーラの王を、ここにおいて教導した。」 [BC 21.4 (P91a1-2; D75a5)]。
 - 16) dus dang mtshungs pa'i glang po dul bar gnas pa na // (P94a1; D. 77b5)。
 - 17) 梶山・小林・立川・御牧訳『ブッダチャリタ』は章名を「教化活動の進展」とする (p. 237)。内容とよく合致する章名である。
 - 18) DA のテキストとして、*Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*, ed. by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886 (Reprint: Delhi, 1987) を使用する。
 - 19) *Aśokāvadāna* の略。 *Aśokāvadāna* は DA 第 29 章の名称であるので紛らわしい。しかし便宜上、DA 第 26 章～第 29 章を *Aśokāvadāna* と呼ぶことも珍しくないため、これら四章に対し、AA の略号を使用する。
 - 20) DA p. 248, l. 15- p. 252, l. 7; 『雑阿含経』(T. 2, p. 166b18-167c13); 『阿育王伝』(T. 50, p. 103a22-104a28); 『阿育王経』(T. 50, p. 136c1-138a18) ※T は『大正新脩大藏経』を指す。
 - 21) J. S. Strong, *The Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton: Princeton University Press, 1983, p. 123, n. 61.
 - 22) asmin pradeśe jaṭilasahasraṃpravrajitam (DA p. 393, l. 26)。
 - 23) asmin pradeśe rājño bimbisārasya dharmam deśitam rājñā ca bimbisāreṇa satyāni dṛṣṭāny aśītibhiś ca devatāsahasrair anekaiś ca māgadhakair brāhmaṇagrhapatisahasraiḥ (DA p. 393, l. 26 - p. 394, l. 1)。
 - 24) asmin pradeśe bhagavatā śakrasya devendrasya dharmo deśitaḥ śakreṇa ca satyāni dṛṣṭāny aśītibhiś ca devatāsahasraiḥ (DA p. 394, ll. 1-3)。
 - 25) asmin pradeśe mahāprātihāryaṃvidarśitam (DA p. 394, l. 3)。
 - 26) asmin pradeśe bhagavān deveṣu trayastriṃśeṣu varṣā uṣitvā mātur janayitryā dharmam deśayitvā devagaṇaparivṛto 'vatirṇaḥ (DA p. 394, ll. 3-5)。
 - 27) vistareṇa yāvat sthavīro rājānam aśokam kuśīnagarīm upanāmayitvā dakṣiṇaṃ karatālam abhiprasāryovāca / asmin pradeśe mahārāja bhagavān sakalaṃ buddhakāryaṃ kṛtvā nirupadhiṣeṣe nirvāṇadhātau parinirvṛtaḥ (DA p. 394, ll. 5-9)。
 - 28) この点は、既に拙稿『為母説法と涅槃経：『摩訶摩耶経』を手がかりとして』(『仏教史学研究』50 (2), 2008 年) にて指摘した。
 - 29) この記述に対応する箇所は梵文を欠くが、蔵訳『Dul-ba phran- tshegs-kyi gshi (北京版 No. 1035[Ne, 274b5-275a5]; デルゲ版 No. 6[Da, 290a6-290b6]) が存在する。対応する箇所の記述内容は漢訳『雜事』(T. 24, p. 399c2-7) と逐語的に一致するので、本文中には漢訳を挙げる。対応箇所のチベット文は次の通り。ji ltar mnyan yod du cho 'phrul chen po bstan pa dang / ji ltar sum bcu rtsa gsum lha'i gnas su skrun pa'i yum gyi thad du gshegs nas chos bshad de grong khyer sgra can du bab pa dang / ji ltar phyogs gang dang gang na gdul ba de dang de dag btul nas / sangs rgyas kyi mdzad pa mthar phyin te / grong khyer rtsa can du tha ma'i gzims mal du gshegs pa de lta bu'i ri mo dag bri bar bya zhing / (P275a3-5; D290b5-6)。
 - 30) 「まだ『六波羅蜜』という定型に収斂してはいない」(平井・2002, 31 頁) と指摘されるとおり、「波羅蜜」と

いう語は出ないが、「波羅蜜行」と類似する項目の組み合わせが見出せる（檀・戒・精進・忍・三昧、など）。

- 31) 丸括弧 () 内の数字とアルファベットは、『大正新脩大藏経』第4巻の頁数・コラム数・行数を指す。
- 32) 如是世尊於波羅奈國。而轉法輪。初轉此法時。多饒益衆生。即於此夏坐有益於摩竭國王。第二*三四於靈鷲頂山。第五脾舒離。第六摩拘羅山(白善)爲母故。第七於三十三天。第八鬼神界。第九拘苦毘國。第十枝提山中。第十一復鬼神界。第十二摩伽陀閑居處。第十三復還鬼神界。第十四本佛所遊處。於舍衛祇樹

給孤獨園。第十五迦維羅衛國釋種村中。第十六還迦維羅衛國。第十七羅閱城。第十八復羅閱城。第十九栴梨山中。第二十夏坐在羅閱城。第二十一還栴梨山中。於鬼神界不經歷餘處連四夏坐。十九年不經歷餘處。於舍衛國夏坐。如來如是最後夏坐時。於跋祇境界毘將村中夏坐。世尊已度愛淵如是。曩昔諸佛所作惠施利根皆悉成就。諸行普至志性柔和皆悉度已。次度中根次度軟根。漸漸使至須陀洹。與外學演說。世尊皆周遍。爾時便取涅槃。(T. 4, p. 144b1-18; * 宋元明版に従い「三」を「三四」に訂正。